

# 石田正之 論文内容の要旨

主 論 文

Transbronchial Biopsy Using Endobronchial Ultrasonography with a Guide Sheath Increased the Diagnostic Yield of Peripheral Pulmonary Lesions

(ガイドシース併用気管支腔内断層法による気管支鏡下肺生検は、肺野末梢病変の診断率を向上させる)

Masayuki Ishida, Motoi Suzuki, Akitsugu Furumoto, Yoshiko Tsuchihashi,  
Koya Ariyoshi, Konosuke Morimoto

石田正之 鈴木基 古本朗嗣 土橋佳子 有吉紅也 森本浩之輔

Internal Medicine  
(51 : 455-460,2012)

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科新興感染症病態制御学系専攻  
(主任指導教員：有吉 紅也 教授)

## 緒 言

近年、画像診断技術の向上により、20 mm未満の末梢肺野の小型病変が多く発見できるようになった。一方で末梢肺野病変に対する従来型の気管支鏡下肺生検 (TBB) の診断率には限界があり、CT ガイド下生検や胸腔鏡下肺生検などのより侵襲の高い検査に診断を委ねる必要があった。

栗本らによって開発されたガイドシースを併用する気管支腔内超音波断層法 (EBUS-GS) は、末梢肺野病変の診断率を向上させることが期待されるが、これまで従来型の気管支鏡と診断率を比較した研究はない。そこで、今回 EBUS-GS 導入前後の比較を行うことで、末梢肺野病変に対する EBUS-GS の有用性を検討した

## 対象と方法

2003年12月から2009年11月までの期間に、長崎大学病院感染症内科で末梢肺野病変に対する TBB が施行された全症例を対象とした。診療録から性別、年齢、病変のサイズ、病理診断などに関する情報を収集し、EBUS-GS 使用群と非使用群の2群に分けて比較した。解析には、単変量・多変量解析を用いて両群の診断率比を算出した。尚びまん性病変に対する検査は除外した。

## 結 果

解析対象は 110 病変であり、EBUS-GS 群が 65 病変、非使用群が 45 病変であった。両群の性別、年齢、病変サイズ、病変部位、病変の良悪性の割合に有意な差は認めなかった。全体の診断率は、EBUS-GS 群で 64.6%、非使用群 46.7%で、EBUS-GS 群が有意に高かった ( $p=0.03$ )。多変量解析の結果、非使用群に比べて EBUS-GS 群で診断率が 1.46 倍上昇することが判明した。また EBUS-GS で病変の描出が確認できたのは 53 病変 (81.5%) であり、EBUS-GS 可能であった場合は、診断率が 1.63 倍高くなることが判明した。さらに従来 TBB を推奨されていなかった 20 mm未満の小型病変についても診断率を上昇させる傾向が認められた。

## 考 察

今回の研究で EBUS-GS を用いた気管支鏡下肺生検は、非使用群に比較して有意に診断率を向上させ、肺野末梢病変に対して有用な検査手技であることが示された。本研究は単一施設における後ろ向きの検討であり、より正確な EBUS-GS 併用による診断率の向上を検討するためには前向きの多施設研究が必要である。